

小学生の体育座りに関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36014

小学生の体育座りに関する研究

学校教育教員養成過程 00-037 沢野咲知子

I. 研究の動機・目的及び意義

体育の授業や、全校集会、運動会で座るとき、我々はどうのような座り方をしてきただろうか。おそらく、「体育座り」を思い描く人が多いだろう。その呼び方は、「体操座り」「三角座り」「お山さん座り」など様々であるようだが、筆者も、幼稚園か小学校の頃にこの座り方を教わり、様々な場面でこの座り方をしてきた。この座り方は、『集団行動指導の手引』の中で、「腰をおろして休む姿勢」として示されている基本的な行動様式の一つである。

このように、日本では、「体育座り」は学校教育の場面において、当たり前のように行われているが、外国では、「体育座り」はほとんど行われていないようだ。アメリカ、オーストラリア、インドでは教師が「床に座りなさい。」と言うと、子どもたちは胡坐を組み、中国では、正坐、もしくは膝を斜めにした斜め座りをするそうだ。外国では、様々な姿勢がとられているのに、なぜ日本では「体育座り」という決まった座り方が示されているのだろうか。

そもそも、学校教育の場面において、なぜ「体育座り」が行われているのだろうか。我々「体育座り」をする側は、当然のように行ってきたが、「体育座り」をさせている教師は、何を目的として「体育座り」を子どもたちにさせているのだろうか。「体育座り」が、『集団行動指導の手引』において、「腰をおろして休む姿勢」として示されているように、その目的が、子どもたちを休ませるためであるのなら、もっと楽な姿勢も考えられるだろう。このように、「体育座り」について考えてみると、疑問に思うことがいくつかあることに気づく。これまで当たり前のように行われてきた「体育座り」を見直してみたいと思ったことが、本研究の動機である。

本研究では、「体育座り」がどのようにして学校教育に取り入れられてきたのかを明らかにすることを第一の目的とする。第二の目的は、実際に学校教育において子どもたちが「体育座り」をする場面や「体育座り」をしている時間、及び、教師がどのような指導をしているのか、教師の「体育座り」の捉え方などを調べることにより、「体育座り」の現状を明らかにすることである。そして、これまで述べられてきた集団行動に対する批判的な見解を概観し、また「体育座り」の現状を批判的にみていくことにより、「体育座り」の問題点を考察することを第三の目的とする。

これまで、あまり問題視されることなく、当たり前のように行われてきた「体育座り」を取り上げることにより、「体育座り」を見直し、問題化するきっかけになるのではないかと考える。また、「体育座り」の問題点を考察し、あげることにより、学校で行われている集団行動の本質の一端も見えてくるのではないかと考える。

II. 研究の方法

第一に、「体育座り」が学校教育に取り入れられてきた歴史を明らかにするために、『集団行動指導の手引』（昭和 40 年度版）、『体育（保健体育）科における集団行動指導の手引』（昭和 62 年度版）、『体育（保健体育）における集団行動指導の手引（改訂版）』（平成 5 年度版）を主な史料として用いる。

第二に、「体育座り」の現状を明らかにするために、金沢市内の小学校（K 小学校、F 小学校）の現場教師（O 教師、S 教師、E 教師、Y 教師）に対するインタビュー調査と、そこから得られた、子どもたちが「体育座り」をする場面の観察・分析を行う。インタビュー調査においては、質問の大まかなガイドライン（下記参照）を事前に作成するが、相手の意向や状況を尊重し、臨機応変に質問を行うインフォーマルインタビュー（非指示的面接法）によるものとし、2003 年 10 月 23 日から 2003 年 11 月 25 日にかけて行った。また、子どもたちが「体育座り」をする場面の観察・分析においては、各授業は一台、全校朝礼は二台の VTR で全体を収録し、それを持ちかえって再生し観察しながら記録する。観察カテゴリー及び記録方法は以下の通りである。また、各授業、全校朝礼の収録は、2003 年 11 月 25 日から 2003 年 12 月 12 日にかけて行った。

<質問の内容>

1. 「体育座り」をする場面について
2. 「体育座り」をする時間について
3. 教師の目から見る子どもたちの「体育座り」をしている様子について
4. 「体育座り」の指導について
5. 教師の「体育座り」の捉え方について

<観察カテゴリー・記録方法>

1. 子どもたちが座った場面→自由記述式
2. 子どもたちが座っていた時間→時間を計る
3. 教師が子どもたちを座らせた時の行動→自由記述式
4. 教師が子どもたちを座らせた目的→以下の観察カテゴリーに従って分類・記録
①教師や友達の話に注目させる ②見学させる ③休ませる ④その他
5. 座っている時の子どもたちの様子→以下の観察カテゴリーに従って分類・記録
① 正坐 ②胡坐 ③体育座り(立膝) ④方立膝 ⑤跪坐 ⑥横坐り ⑦その他

第三に、「体育座り」の問題点を考察するために、これまで述べられてきた集団行動に関する論説を用いて見解を概観する。さらに、横井小児科内科医院院長の横井透氏にインタビュー調査を行い、医師の「体育座り」の姿勢に関する考えを参考資料としてあげる。横井氏に対するインタビュー調査の質問の大まかなガイドラインは以下の通りである。

<質問の内容>

1. 「体育座り」の姿勢について(どこに負担がかかっていると考えるか)
2. 横井氏が考える楽な姿勢について

なお、本研究で対象を小学生とした理由は、筆者が小学校教諭を目指していることから、小学生に関心があったことと、学校教育における「体育座り」のプロセスを研究する上では、「体育座り」をする場面は小学校においてが最も多いのではないかと考えたためである。

Ⅲ. 「体育座り」が学校教育に取り入れられてきた歴史

「体育座り」は、『集団行動指導の手引』において、「姿勢」の項目の中で、「腰をおろして休む姿勢」として示されている。『集団行動指導の手引』が初めて作成されたのは、昭和40年である。この『集団行動指導の手びき』作成の背景は以下の通りである。戦後、教育における軍事色の一掃により戦前の「教練」が禁止される。それによって、学校現場には無秩序がもたらされ、昭和21年に「秩序・行進・徒手体操実施に関する件」が出され、再び学校教育に、戦前の行動様式が取り入れられ始めることとなる。そして、昭和28年の学習指導要領で戦後はじめて「集団行動」ということばが取り上げられるが、ここでは行動様式の様式は規定されていなかったため、全国バラバラの集団行動が存在することとなる。そこで、「全国的に統一を」という要望にこたえて、文部省が昭和40年度版『集団行動指導の手びき』を作成した。しかし、ここに示されている行動様式は、戦前の行動様式とほとんど変わっていなかった。その原因は、集団行動の行動様式の方法や内容についての吟味が十分にされていなかったためではないだろうか、と考えられる。

その後、学習指導要領の改訂に伴い、昭和62年度版『体育(保健体育)科における集団行動指導の手引』では、これまで技能の内容として取り扱ってきたものを、態度の内容として位置づけた点、平成5年度版『体育(保健体育)における集団行動指導の手引(改訂版)』では、体育(保健体育)の教科においては、運動の学習との関連を図りながら、基本的な行動様式を体得させるようになった点、特別活動における集団行動指導が強調された点が改訂されたが、戦前とほとんど変わらない行動様式は、大きく変化していないということがいえる。また、『集団行動指導の手引』には、なぜ「体育座り」の姿勢なのか、ということの理由は示されていない。

IV. 「体育座り」の現状

1. 子どもたちが「体育座り」をする場面

現場教師に対するインタビュー調査では、子どもたちが「体育座り」をする場面は、大きく分けて以下の三つに分類することができる。

- ①全校朝礼、避難訓練、運動会など、全校生徒が一斉に集まる学校行事。
- ②体育の授業。
- ③教室での椅子がないときの授業。

さらに、それらの場面を VTR で収録し、観察すると、以下のことが明らかになった。まず、ほとんど全員の子どもたちが「体育座り」をするのは、教師の話聞く場面、挨拶の前に姿勢を正す場面、整列して待機する場面、教師に注意される場面である。しかし、子どもたちの注意が教師意外に向けられやすい場合は、教師の話聞くときでも「体育座り」をする子どもは少なくなる。

2. 「体育座り」をする時間

VTR による観察から、以下のことが明らかになった。子どもたちが「体育座り」をしていた時間は、全校朝会では、約 10 分間。体育授業では、約 2 分 42 秒間。教室での授業では、約 6 分 30 秒間。しかし、子どもたちが「体育座り」の姿勢を持続することができる時間は約 5、6 分間である。

3. 「体育座り」をしている子どもたちの様子

現場教師に対するインタビュー調査と、VTR による観察から、以下のことが明らかになった。

- ・体格が大きい子どもは手を組みにくそうである。
- ・「体育座り」以外の座り方をしている子どもに比べて、「体育座り」をしている子どもの方が、顔が動かないため、話し手に集中することができる。
- ・姿勢が動く子どもは決まっている。
- ・子どもたちは「体育座り」の姿勢を崩す際、場面やスペースを考慮して姿勢を崩している。(全校朝会…足をクロスさせる、背中を丸めて体を揺らす、割坐到近い状態。体育授業や教室での授業…正坐、胡坐、横坐り、しゃがむ、手を後ろにつけて足を伸ばす。)
- ・担任の教師の学級経営の仕方によって、子どもたちの様子も違う。
- ・全校朝礼で約 10 分間「体育座り」をしていた後に、今月の歌を歌うために立ち上がる場面では、半分近くの子どもたちが腰や背中を伸ばす姿が見られる。

4. 「体育座り」の指導

現場教師に対するインタビュー調査により、以下のことが明らかになった。小学校においては低学年の間に、折に触れて行われているが、幼稚園から行われているのではないだろうか。また、指導方法は一人一人の教師によって異なり、姿勢よりも目や体を話し手へ向けることに重きをおいている教師もいれば、手を組む位置や膝の開きなど細かく指導する教師もいる。また、VTR による観察では、教師が子どもたちを座らせるとき「体育座りをしなさい。」という指示は、ほとんどなかった。

5. 教師の「体育座り」の捉え方

現場教師に対するインタビュー調査により、以下のことが明らかになった。

まず、教師は「体育座り」を当たり前のものとして捉えており、あまり意識せずに子どもたちに「体育座り」をさせている、ということがいえる。しかし、改めて「体育座り」について考えた意見から考察すると、教師は「体育座り」を以下のように捉えているといえる。

- ・「体育座り」=きちんとした印象である。
- ・話を聞く上で合理的な座り方であり、集団をまとめる上でも都合の良い座り方である。
- ・姿勢の面から見ると、つらい姿勢なのではないか。

6. 子どもたちの「体育座り」の捉え方

体育授業において、教師が二年生の子どもたちに並び方の指導をする場面があった。教師が「先生の話が聞けるように並ぶにはどうする？」と問いかけると、「上手な座り方をする。」と答える子どもがいた。そこで、教師が上手な座り方をするように指示すると、全員

が「体育座り」をして背筋を伸ばした。以上のことから、教師の捉え方と同様、子どもたち自身も「体育座り」＝きちんとした印象と捉えている、といえる。

V. 「体育座り」の問題点

- ①現在の集団行動の行動様式が、戦前の行動様式とほとんど変わっていない点。
- ②行動が画一的にとられている点。画一的に「体育座り」の姿勢をとることだけが先行し、話し手へ意識を向けるということが失われていては意味がないだろう。
- ③「体育座り」の姿勢は、腰、お腹、お尻に負担がかかっており、体格の大きな子どもにとっては決して楽な姿勢ではない、と医師から指摘される姿勢である点。
- ④学習障害や注意欠陥・多動性障害（ADHD）の子どもたちに対する指導は難しい点。
- ⑤現場の教師たちは「体育座り」を当たり前のものとして捉えている点。

VI. 結論

- ①「体育座り」が学校教育に取り入れられた歴史は、昭和 40 年に作成された『集団行動指導の手びき』がきっかけである。ここでは、集団行動様式の一つとして、「姿勢」の項目の中で、「腰をおろして休む姿勢」として示されている。しかし、ここに示されている集団行動の行動様式は、戦前の教練の行動様式とほとんど変わっていない。その原因は、行動様式の方法や内容についての吟味が十分になされていなかったためではないだろうか。また、『集団行動指導の手びき』には、なぜ「体育座り」の姿勢なのか、ということの理由は示されていない。
- ②小学校において、「体育座り」は、全校朝会や体育授業、教室での椅子がないときの授業で、教師の話を聞くときなどに行われているということが明らかになった。しかし、子どもたちがこの姿勢を持続できる時間は、約 5, 6 分間であり、体格の大きい子どもにとってはつらい姿勢であるといえる。しかし一方で、「体育座り」をしている子どもは、「体育座り」以外の座り方をしている子どもに比べて、顔が動かず、手悪戯もしないため、話し手に集中することができるということから、「体育座り」は、集団で人の話を聞いたりする上で合理的な座り方である、といえる。また、教師は「体育座り」を当たり前のものとして捉えており、あまり意識せずに子どもたちにさせている。さらに、教師と子どもたちの間で、「体育座り」＝きちんとした印象である、という暗黙の了解が存在していることが、現状としていえる。
- ③「体育座り」の問題点として、前述の問題点をあげることができるが、筆者は、現場の教師が「体育座り」を当たり前のものとして捉えているため、「体育座り」を問題視することなく、子どもたちに指導しているということが大きな問題であると考える。このように、当たり前のものとなっていて、我々はそこに存在する問題に目を向けていない、ということが、現在の学校教育の場面で行われている他の集団行動においても、いえるのではないだろうか。

VII. 今後の課題

本研究では、対象を小学生に限定して行ったが、集団での教育の場が設けられている幼稚園、中学校、高等学校における「体育座り」の現状についての観察・分析も行うことで、さらに厳密な「体育座り」の現状が現れてくると思われる。また、現在は「体育座り」の姿勢に関する研究が行われていない。今後、姿勢の面からの研究が行われることで、より専門的な示唆が加えられると思われる。

<主要引用参考文献>

- 文部省（1965）『集団行動指導の手びき』学研書籍
文部省（1987）『学校体育実技指導資料第 5 集 体育（保健体育）科における集団行動指導の手引』ぎょうせい
文部省（1993）『学校体育実技指導資料第 5 集 体育（保健体育）における集団行動指導の手引（改訂版）』東洋館出版社